

クライスト研究： 『ローベルト・ギスカール』について

南 勉

序

作品『ローベルト・ギスカール』は1802年スイスで着手され1803年にはほぼ完成していたが、クライストはこの草稿を1803年10月旅先のパリで焼却した。現在のテキストは、再度書き改められて1808年に上梓されたものである。⁽¹⁾前稿の朗読を聞かされたマルティン・ヴィーラントは、「アイスキュロスとソフォクレスとシェイクスピアが一緒になって悲劇を書いたとするなら、クライストの『ノルマン人ギスカールの死』こそそういうものであろう。勿論全体が、彼が私に聞かせてくれたものに一致していればの話だが」⁽²⁾と述べて、前稿を絶賛している。

当該作品の素材は、シラー主宰の『ホーレン』誌に掲載されたK.W.F.フンクの『アプリア及びカラブリア公、ローベルト・ギスカール』である。クライストは、この素材をかなり自由に利用した。フンクの史伝によると、ギスカールはコンスタンチノーブルへの遠征途上1085年に死亡し、飢餓がローベルトの陣営に蔓延しその結果死病が発生して三ヶ月の間に騎士500人、一般人1万人以上が命を落とした。⁽³⁾

当該作品は、コンスタンチノーブルを指呼の間にしたギスカールの陣営でペストが発生して猛威をふるっている場面で始まる。ペストはライト・モチーフであり、生命の危機を痛感する民衆を大混乱に陥れる。さらにペストは、それまで表面化していなかった二人の公子ローベルトとアベラールの不和対立を明るみに出す。ペストは、主君にして主人公であるギスカールにとりつき、ギスカールの不当な行為と欲念を白日の下にさらし、最終的にギスカールの発想を徹頭徹尾否定している。これによって、支配者階級である王侯貴族の立場と非支配者階級である民衆の立場が逆転して行く。これが、当該作品のダイナミズムであり、また醍醐味でもある。このような観点から、本稿において当該作品を考察してみたい。

本稿の構成は以下の通りである。第一節において、民衆の役割と代表システムについて分析する。第二節において、二人の公子に焦点を当てて、それぞれの性格を分析し不和対立の原因と理由について検討する。第三節において、主人公のギスカールの発想と罪について分析する。第四節において、民衆の代表の長であるアルミーンが発想と行動を明らかにする。第五節において、作品のライト・モチーフであるペストに焦点を当てて、ソフォクレスの『オイディプス王』との相違について検討し、作品を総合的に考察する。

第 一 節

当該作品は、コンスタンチノーブルを目前にしたローベルト・ギスカールの陣営におけるペストの発生と跳梁という、想像を絶する状況から始まっている。軍隊の基盤をなす民衆は、生命の危険を痛感し、陣営には著しい混乱が生じている。ここでは、軍隊の底辺を構成している民衆について考察してみよう。

ギスカールの陣営にペストが跳梁して死体の山が築かれて行く時、民衆の不安は尋常ではないが、彼等は決して個別勝手な行動にはでない。民衆が主君に直訴することは認められていない。彼等は、その故に長老たちに希望と方策を託すのである。

熱い祝福の言葉をもって、長老様方よ
 我らはギスカール殿の天幕まで長老様方に同行致します。
 軍隊の波が不安でいたたまれずこぞって押し寄せても
 泡と空しく砕け散るあの大岩を
 長老様方が揺さぶりに行かれれば
 神の裁きを司る智天使が、長老様方をお導き下さいます。(S .155)

民衆は、ここで波に譬えられている。支配者ギスカールは、どれほど波が激しく打ち寄せようとも微動だにしない岩に譬えられている。当該作品において民衆は五回波に譬えられているが、波に主体性はなく、風の動きに支配される。これにひきかえ岩は微動だにしない存在であり、軍隊という波全体がそれを前に空しく泡と砕けてしまう。ここに、主君と民衆の間の強いヒエラルヒーが認められる。主君と民衆の間に直接的な意思の疎通を保証するシステムは存在し

ていない。民衆は主君に直訴する機会と保証が無いために、長老たちと行動を共にするより他になすべき術がない。長老たちは、民衆の代表である。この代表システムは制度化されてはいるが固定的な機関を構成せず、問題が起こった度にその都度代表が選出され、民衆の中の長老の戦士たちから構成される。代表の役割は、民衆と支配者の間のコミュニケーションの伝達であり、代表は特定の役割を引き受けている。⁽⁴⁾民衆の場合、上位に代表がいるためにしっかりした秩序が保たれている。この点に関して、民衆はクライストの処女作『シュロップフェンシュタイン家』における民衆とは全く異なり、極めて近代的なシステムを保持している。代表は、「十二人の武装した男たちで十分であり」⁽⁵⁾、婦女子を含めた他の者の関与を認めない。代表は、緊急時にその都度選出されるにも拘らず、決定的な指導力を持っている。

Daß keiner einen Laut mir wagt! Ihr hörts,
Dem Flehn, will ich, ich sage es noch einmal,
Nicht der Empörung meine Stimme leihn.(S.157)

(訳)

誰もわしに一言も言ってはならぬ。よいな
もう一度言うが、嘆願にはわしの声をかそう、
しかし謀叛に対してその気はないぞ。

この引用は、代表の長アルミーンの発言である。彼は、緊急時において民衆の全権を代表している。引用から明らかなように、アルミーンはどんなに厳しい状況にあっても主君に対するいかなる反乱も謀叛も容認しない。ここに、主君と民衆との関係が如実に反映している。つまり、民衆は主君に対して絶対的な忠誠を誓っており、代表制の下主君に対する民衆の反逆は起こり得ない。アルミーンは、民衆に対して強力な統率力を保持している。代表のみが民衆の意向を主君に伝達できるという事実は、長老たちが体制を安定させるために多大な貢献をしていることを物語っている。長老たちは、この社会的適性のために応分の尊敬を受け評価される。⁽⁶⁾民衆は代表制の下、統制のとれた集団を形成している。国家システムのレベルで、民衆はただ多数としてのみ重要であり、この量的な観点に関してのみ要求を主張できる。他方で民衆はその実質的な基盤として、支配一般を可能にする条件を構成している。⁽⁷⁾この意味において民衆の

存在価値は大きく、主君は民衆によって構成される軍隊の武力に依拠する以上、民衆の実情や要求等を徒に等閑視するわけにはゆかない。主君は、王朝の繁栄と安定のために民衆の生命の安全と安寧を期して対応しなければならない。ここに、主君の道義的な義務がある。民衆の代表も、これに関して事情は異なる。

ペストの発生と跳梁は、民衆にとって存亡の危機である。

Zu Asche gleich,wo ihr Fuß sich wendet,
Zerfallen Roß und Reuter hinter ihr,
Vom Freund den Freund hinweg, die Braut vom Bräutigam,
Vom eigenen Kind hinweg die Mutter schreckend! (S.155)

(訳)

ペストの足の向く所はどこでも、その後には
馬も兵士も倒れてすぐに灰になるのです。
友を友から、花嫁を花婿から引き離し、
わが子から母親を恐怖のために遠ざけるのです。

民衆の哀訴は、ペストの恐怖と惨状を余すところ無く物語っている。この惨状は、民衆だけでなく主君にとっても未曾有の危機である。軍馬と兵士が病没したら、戦どころか自国の支配と統治すらままなくなるからである。また、「友を友から、花嫁を花婿から引き離し、わが子から母親を遠ざける」ということは、あまりに残忍な運命であり、生一般の否定を意味する。ペストのために、主君の意図は達成不可能になり、人間の営み全てが否定される。これは極めて憂慮すべき事態であり、民衆の間に動揺が起こるのは蓋し自明の理である。かかる状況下で危難を免れるためには、早急な撤退より他になす術は無かろう。しかし待望の目的地を目前にして、主君が目標を断念することは有り得ない。民衆は、自らの関心がギスカールの関心に抵触していることを予感している。⁽⁸⁾これは、容易に解決しがたい難問である。民衆の代表の責務は重大であり、身命を賭して両者の間で意思の疎通をはからねばならないのである。

第 二 節

ペストの発生は、民衆の間に大きな不安と動揺を惹起しただけでなく、支配階級の貴族たちとのこれまで明みになかった問題を顕在化させる。それは、ギスカールの実子ローベルトと甥のアベラールの対立である。ここでは、この二人に焦点を当てて、問題点について考察してみよう。

ローベルトは、父の後継者として認定されているが、父ギスカールほどの資質と見識を具備していない。ローベルトは後継者と認定されてはいるものの、王の役割や義務がいかなるものか全く認識していない。彼は、民衆の代表の長アルミーンの嘆願を、一顧だに与えず言下に一蹴する。

Lernen mußst du doch
Noch, was gehorchen sei, und daß ich es
Dich lehren kann, das höre gleich.(S.162)

(訳)

従うとはどういう事か、そちは学ばねばならぬ。

俺がそれを教えてやれるので、即刻耳を傾けるがよい。

この発言は、決して公子にふさわしくない。ローベルトは、事情や理由を一切尋ねようとしなない。アルミーンは、二代の王につかえてきた歴戦の戦士である。彼は経験豊富で王の役割も含めて王国の全てを知悉し、民衆から高い評価を受けている人物である。ローベルトは、思慮のない愚直な公子である。これまで父の絶大な権力を後ろ盾にしてきたために、彼は自分の立場はおろか民衆や代表の立場を一切考慮する必要がなかった。彼には、現時点で将来の王としての資質と見識が欠如している。ここに大きな問題がひそんでいる。

ローベルトの安易な判断には、歴史的事情が多分に反映している。イタリアにおけるノルマン民族の国家創設者ヴィルヘルム・フォン・ノルマンディーには三人の弟がいたが、世嗣がないので継承法に従って順番に王位についた。第三番目の弟の息子アベラールは子供だったが、父が他界した時王位継承者として布告されるはずであった。しかし第四番目の弟ギスカールは、前君から幼い子供の後見人に任ぜられた。——兄弟間の継承の順番が彼にまわってきたとか、民衆が彼を非常に愛していたとかで、彼は君主の座についた。これを実現

させるために用いられた手段は忘れられた。——要するに、ギスカールは三十年来王として君臨し、ローベルトはその世嗣として公認された。⁽⁹⁾これは、作品以前の王家の事情である。このように混乱した状況下で、ローベルトは父の権威によって王位を保証される。試練を経ない人生観が、ローベルトの安直な発想と対応を生み出す淵源になっている。ローベルトは父を見習わず、巧みさという支配者として必要な資質に欠けている。⁽¹⁰⁾

ローベルトと比べ、アベラールの立場はそれほど容易ではない。アベラールは本来ギスカール以前に王位につくはずであったが、それが叶わなかったどころか、現時点ではノルマン王国の王位につけない運命にある。彼は、それでも悲願を断念しない。彼の目には、ローベルトの欠点がよく見えている。

この老人の話しが大胆であり

誇り高いことが、老人にふさわしくないことはないんだ。

というのは、二世代に亘る人々がこの老人を尊敬してきたし

墓へ行く日が近いからといって、三世代目の者が

この老人に対して無礼をなすべきではないからね。(S.162)

この発言は、ローベルトのその対極をなし、ローベルトの欠点をズバリ指摘している。アベラールの対応は実に巧妙であり、老人の肩をもちながら、暗にローベルトを非難している。⁽¹¹⁾彼はさらに、「自由はいわばノルマン人の女房であり／戦場をベットにして名誉を生み出してくれる夫婦こそ／俺には尊いだらうからね」⁽¹²⁾と述べて、老人とその集団におもねっている。彼は、かつてのギスカールと同様王位につくために民衆の支持を求めている。同じ発言で、彼は二度<名誉>について言及している。これは、彼の強い野心を示唆している。アベラールの真の敵はギスカールであるが、公然とギスカールを攻撃することは得策でないので、アベラールはギスカールに対する民衆の高い評価を逆手にとって「ギスカール殿はこのことをよく心得ており／戦士がたてがみにまといつくのを喜ばれるが／その息子のなめらかな首は／誰かが近づいただけですぐ震えてしまうのさ」⁽¹³⁾と、続けてローベルトを攻撃する。ギスカールの<たてがみ>はライオンの強さを象徴し、<なめらかな首>はローベルトの威厳のなさ、未熟さ、それに秘められた恐怖を示唆している。⁽¹⁴⁾アベラールの発想は、常に王位への願望に依拠している。このためにローベルトへの憎悪は、決して消失し

ない。彼の民衆に対する表向きの同調や同情は、この発想に基づく限り、偽善に他ならない。

ローベルトとアベラールの対話は、民衆とその代表を面前にしてギスカールの病気にまで及ぶ。代表が対面を望んで拒否されたとき、ローベルトはギスカールの所用を理由に真相を隠そうとする。ローベルトの立場から見た場合、これは当然の措置であり、仮に真相を告白すれば民衆は大きな混乱に陥ってしまう。支配者側は、立場上民衆を徒に混乱させてはならない。しかし同じ公子の立場にありながら、アベラールは思惑から事実を暴露する。

アベラール

君はこの一群をまるで女のように扱うんだね、
ショックを与えてはならない妊婦のように。
なぜ真相をかくすんだい。ひょっとして、
流産するかもしれないと懸念してるのかい。

(群衆の方を向いて)

ギスカール殿は、気分がすぐれないんだ。

老 人 (驚いて)

とても信じられないことだが、
ペストにかかったのですか。

アベラール そうではない。そうは思わない。――

もちろん医者はその危惧を口にしているが。(S .165)

この発言は、ギスカールに対する間接的な攻撃である。民衆は、この発言によって著しい混乱に陥り、ローベルトは激怒する。アベラールは、ローベルトの退場後同じ発言を繰り返している。⁽⁴⁵⁾アベラールの発言は実に巧妙である。彼自身は病気の可能性を否定しているが、医師は肯定している。それだけに、この発言は民衆に対して一層大きな影響を与えている。

貴族たちの間の不和対立は、ペスト発生以前には決して表面化しなかった。しかし、ペストによってアベラールとローベルトの激しい対立が明るみに出てきた。この対立は、欲念と憎悪に端を発しているだけに容易に解決されない。彼等は、ペストが跳梁して死体の山を日々目のあたりにしているにも拘らず、臣下の身の安全を配慮するどころか、これを絶好の機会とばかりに権力闘争に

狂奔している。彼等は、一致団結した民衆とは対極的に分裂し、本来の義務と役割を全うできない状況に陥っているのである。

第 三 節

当該作品の主人公はローベルト・ギスカールであるが、彼は第十場で初めて作品に登場する。第一節で見たように、ギスカールは微動だにしない岩に譬えられている。彼は民衆に愛され、王としての資質と能力を十分に備えている。また、彼は百獣の王ライオンに譬えられている。民衆と作品の主要な人物たちは、彼を中心にして動いている。ギスカールは、カリスマ性をもった存在である。ここでは、ギスカール像について考察してみよう。

ギスカールは、およそ三十年前にアベラールの後見役に任ぜられ、その後アベラールの生得の王位継承権を否定して自ら玉座についた。これは権力の篡奪であり、欲念に基づく不当な行為である。そしてその後、彼はアベラールを排除して王位を実子に委譲することを公にした。これもまた、ギスカールの不当な行為(Gewalt)である。アベラールは、二度にわたる不当行為によって王位を二度不当に篡奪されている。ギスカールは継承法を、ある時には一方的に否定し、ある時にはまたこれに依拠したりして一貫性がない。ギスカールのこの行動は、明らかに罪(Schuld)である。しかし彼は、絶大の権力を背景に貴族を一体化し、民衆の強力な支持を保持してきた。彼は、権勢欲からコンスタンチノーブルを征服するために、目前のところに迫っている。

ギスカールは陣営でペストが発生してから、死体の処理をしたり病人の世話をしたりと精力的に動いている。この姿は、1799年エジプト遠征途上のナポレオンを彷彿とさせる。アコンの町を包囲していた際にペストが発生し、彼自身死体を埋葬したり病人の世話をしたりした。ナポレオンは、決して病気に感染しなかった。この事情をめぐって、ナポレオンはペストに免疫があるという神話がもちあがった。しかし、ナポレオンは遠征続行を危うくしないために致死量のアヘンを与えて病人を死なせた、ということが、後に明らかになった。¹⁰⁾これはナポレオンに関する史実であるが、ギスカールの場合にも彼の欲念を考慮にいれると、起こり得ないことではなかったかのような印象を与える。

作品に登場するギスカールは、作品以前の彼とは異なり、病に感染して苦しんでいるように見える。

Da ich die Wache, um Mitternacht,
 Am Eingang hier des Guiskardszeltes halte,
 Fängts plötzlich jammervoll zu stöhnen drin,
 Zu ächzen an, als haucht´ ein kranker Löwe
 Die Seele von sich. (S.160)

(訳)

俺が深夜、ここギスカール殿のテントの入口で
 見張役を勤めていたとき、
 突然中で苦しもうなったり、わめいたりし始めたんだ。
 まるで病気のライオンが今にも息を引き取るかのようだった。

うなり声とわめき声の主体が誰であるのかこの引用では特定されていないが、「病気のライオン」という表現からギスカールであることが明らかである。決定的な確証こそないもの、この報告はギスカールの感染を十分予感させる。病状を案じるアルミーニに対して、ギスカールは次のように答える。

わしの体はまだどんな病気にも勝てるんだ。
 たといペストであっても、わしはそちどもに断言する。
 この骨に食らいつけば、ペスト自身が病んでしまおうとな。(S.171)

この発言は表向き強気に聞こえるが、ギスカールは不安を巧みに隠そうとしている。病気の重大さを小さくしようとする試みは、真実を隠そうとする罪ある人の行動である。⁴⁰⁾このような不快な状況の中でも、彼は野望を決して断念しない。

ギリシャの指揮官ネッススとロクシアスに対して
 ——周知のように、密かにギスカール殿に城鍵を渡すために
 二人はとっくにある条件を出していたのです。
 ——ある条件と言ったが、叔父によって今日まで
 威厳をもって頑なに拒否されたのです。
 今日叔父は、この条件に同意する文書を持たせて
 二人に使者を送ったのです。(S.167)

ネッススとロクシアスは、コンスタンチノーブル側の内通者である。ギスカールの娘ヘレーナはギリシャの皇后であり、アレクシス・コムネスによって王位から追放された。ここにおける条件は、ヘレーナが息子たちの後見人として復位するのではなく、ギスカール自身が王位についてほしいという内容であった。⁴⁸この条件への同意は、ギスカールの野心と権勢欲を示唆している。この王位は、本来娘ヘレーナのものであり、ヘレーナは作品においてアベラールの婚約者と設定されている。ギスカールは、ここにおいて三度罪を犯している。彼は、欲念の権化となりて自分の野望以外は眼中にない。苦しむ軍隊の嘆願にも拘らず、野望実現のための決断は、ギスカールの民衆への愛を疑問視させる。⁴⁹ギスカールは、主君としての義務を放棄してひたすら破滅への道をたどり、まさしく「病気のライオン」と化しているのである。

第 四 節

ベストは、異常な混乱状況をもたらし、かつては想像もつかないような面を明るみに出した。その典型は、支配者階級の人々であり、ベストの発生前と発後とは発想に分裂が生じている。それでは、当該作品において終始一貫した発想の人物はいないのであろうか。否、民衆の代表の長アルミーンのみは、一貫した発想に基づいて行動している。ここでは、アルミーン像について考察を進めよう。

ギスカールのテントの前で面談を嘆願したとき、ヘレーナは「これほど多くの人がぐると集まっていれば／静かにしていても海のようなもの／打ち寄せる波はざわざわとうるさいのです」⁵⁰と述べて、退散を求める。しかしアルミーンは、民意を的確に把握し己の役割を十分自覚しているので、決して安易な妥協はしない。主君への忠誠、一貫した認識と気迫が、ヘレーナから譲歩をひきだす。この事情は、ローベルトやアベラールに対しても変わらない。ローベルトの不遜不見識な発言に対して、アルミーンは怯む事なく考えを述べる。

公子様は手前の年になっても

いかにわしらが指揮官を敬っているか分からないでしょう。しかし手前は公子様のお年頃には、兵士の本分を十分弁えておりました。手前とどう話したらよいのか知りたいのなら、

お父君のもとへ行って、おたずね下され。(S.161)

これは、家臣として実に厳しい発言である。アルミーンは、ローベルトに主君としての資質と見識がないのを見抜いて鋭い批判を展開している。彼は、ギスカールとローベルトを明確に区別し、ギスカールをはるかに優位に置いている。彼は知的で責任感が強く、民衆の意向から少しも離脱しない。ローベルトに退散するように求められても、ただでは引き下がらない。

公子様が行けとお命じでしたら、手前どもは逆らいませぬ。
公子様はギスカール殿の御子息、これで十分です。
手前どもは戻ってきて良いのか、いつ戻ったらよろしいのか、
申して下さい。そうすれば手前は、この一群を連れて戻ります。
(S.164)

アルミーンは、表向きローベルトの命令に従っている。しかし、その理由はローベルトが「ギスカールの御子息」であるからである。アルミーンはギスカールへの忠誠心から従うのであり、ローベルト自身に従っているわけではない。ここにもローベルトに対する評価が、如実に反映している。アルミーンは、ローベルトを歯牙にもかけていない。

アルミーンは聡明な老人であり、アベラールの本質も的確に把握している。彼は、アベラールに対しても一貫した姿勢を取っている。アベラールの民衆に対する理解と同情を彼は賞賛し、アベラールの頭上に祝福の雨が降り注ぎ、幸運の芽が大きく育つことを切望する。⁽²⁾しかし、彼はアベラールへの忠告と批判も決して忘れない。

幸運の芽を育む土にできることを
疑ってはなりません、公子様、大丈夫です。
しかし僭越ながら、その芽を成長させるために
つまらぬ人臣という肥やしは必要ないのです。
畑はできるならきれいなままでなければなりません。(S.165)

「つまらぬ人臣という肥やしは必要ない」という表現は、アベラールの欲念

に対する抑制的な批判である。彼は、アペラールの能力と資質に理解を示しながら、忍耐と自重を求めている。

アルミーンは、ギスカールに対しても一貫した姿勢を貫き、決して怯むことはない。彼は、ギスカールを気づかい病状を尋ねた後で、ペストによる惨状を切々と訴える。

しかし殿の足腰である民衆は感染し
 もはや全く行動できません。
 そして日々、嵐に襲われたモミの木のように
 殿に忠実な者どもは倒れて埃にまみれております。(S.172)

アルミーンは、民衆のことを最大限配慮し、その意向を強く訴えている。これに対して、ギスカールは何も答えない。そして当該作品は、「手前どもを祖国へ連れ帰ってくだされ」⁽²²⁾というアルミーンの悲痛な訴えで終わっている。ヘレーナもローベルトもアペラールも、老人のアルミーンに対抗できない。彼等は、一貫した発想を持たない未熟な存在である。主君ギスカールは、捨て難い野望のために本来の役割を忘れて、その結果「病気のライオン」と化し、野望を実現する力をもう喪失している。彼も自己の発想を貫く力を失い、もはやアルミーンに対抗できない。ここにおいて、支配者と民衆の力関係が完全に逆転している。これが、当該作品のダイナミズムである。

第 五 節

当該作品は、ペストで始まりペストで終わっている。全てがペストに支配され、筋が展開して行く。ペストは、作品のライト・モチーフである。ここでは、ペストに焦点をあてて、作品を総合的に考察してみよう。

罪を予告する運命としてのペストは、クライストが『オイディプス王』の中に見出した一つのモチーフである。『オイディプス王』において、ペストは償われていない人間の罪に対する罰として現れ、古代の世界観によると、ペストは神の世界秩序という厳格な正義から必然的に現れる。⁽²³⁾疫病の原因は、オイディプス王にとって運命的な不覚の過誤である。クライストの場合その原因は決して運命的なものではなく、「病気のライオン」に譬えられたギスカール像から明

らかなように、個人的な罪である。

ペストは、大きな混乱の最大要因であり、恐ろしい怪物として描かれ、その息は毒、その産物は死体の山と灰である。ペストは、「友から友を、花嫁を花婿から引き離し、わが子から母親を恐怖のあまり遠ざけてしまう」⁽⁴⁾、人間の営みそのものを根本的に否定する疫病である。ペストが蔓延する中、生き延びるためには撤退しかないと民衆は認識するが、主君の意向とは対立する。民衆は、代表システムによって統制がとれているので反逆行動にこそ出ないものの、大変な苦境に置かれている。しかも、その原因は民衆にはないのである。

ペストは、表面化してなかった貴族社会の分裂対立を明るみに出す。それは、ローベルトとアベラールの凄まじい権力闘争である。ギスカールが疫病に感染したような観を呈しているために、公子たちの対立は深まるばかりである。ローベルトの権力欲は、「民衆のための支配ではなく民衆の支配」⁽⁵⁾を予感させる。他方アベラールは、ローベルトを非難しつつ密かにギスカールを排除しようと企んでいる。支配者たちの意識は分裂し、本来の役割と義務をないがしろにしている。しかし、対立の直接の原因は二人の公子にはない。公子たちは、作品の結末まで決してペストに感染しない。

ペストは、クライストの場合自然に反する人間の過失を立証する否定的原理である。⁽⁶⁾「自然に反する人間の過失」とは、ギスカールによる権力の篡奪である。彼は、継承法を一方向的に踏みにじって玉座についた。これは、極めて不当な行為であり、明らかな罪である。そして、この罪は償われていない。

ギスカールの行動が故意であるのに対し、オイディプス王の場合全てが神神によって支配されている。オイディプスの父ライオスは、実の男の子から殺害されるという神託を受け、生後三日も経ないうちに男の子を牧人に托して山奥に捨てさせた。羊飼いの憐憫によって命拾いしたオイディプスは、別な王家に預けられて立派な王子に成長する。ある酒席で自分は王の実子ではないと聞かされたオイディプスは、デルポイの神託をうかがう。その内容は、オイディプスが実の父を殺し、実の母と交わって子をなすということだった。驚いた彼は、罪を恐れて放浪の旅に出るが、実の父を期せずして殺害し、スフィンクスの謎を解いてテバイの王として迎えられ、はからずも実の母と交わり子を成してしまう。この行動は近親相姦という罪に当たるが、決して故意ではなく神神の支配による運命である。全ての災いが己に帰着すると認識した彼は、両目を潰して罪を償う。彼は、神託という規範に忠実に従っている。これに対し、ギスカー

ルは従うべき規範を持っていない。そのために彼には罪の自覚がなく、罪を償おうとはしない。ここに、両者の決定的な相違がある。ギスカールは、近代人の相貌を色濃くおびている。

ペストは、クライストの場合罪の原因への問いを提起している。⁽⁷⁾ギスカールは、自己の欲念に一貫して忠実である。彼は、是が非でも征服欲を満たそうとする。コンスタンチノーブルの征服は、アベラールに対する二重の罪であり、主君としての義務の放棄でもある。彼は、欲念のためには民衆の生命など歯牙にもかけない。しかし、彼の野望は、墓石の征服になること必定である。「ギスカールの自己実現は、ギスカールの自己否定」⁽⁸⁾を意味する。切々と嘆願するアルミンに対して、彼は全く応答できない。彼の病状は、悪化の一途をたどる。主要な登場人物ローベルト、ヘレーナ、アベラールそれにアルミンは、作品の結末まで病のやの字すら感じさせない。それにひきかえ、ギスカールのかつての強いライオンのイメージは、完全に消失している。ペストは、罪を償うどころか新たに罪を重ねるギスカールを否定する原理として機能し、これによって支配者と被支配者の立場が逆転し、ギスカールの欲念が否定され、老人アルミンの健全な雄姿がいつそう大きく浮かび上がってくるのである。

註

- (1) H.v.Kleist:WERKE UND BRIEFE Bd.I(以下Kleistと略記),C.Hanser Verlag München 1976. S.921
- (2) Ebd.S.923
- (3) Ebd.S.922
- (4) I.Denneller:Legitimation und Charisma in Kleists Dramen・Neue Interpretation, Hrsg.von Walter Hinderer Reclam Stuttgart 1981.S.77
- (5) Kleist, a.a.O.,S.156
- (6) I.Denneller, a.a.O.,S.80
- (7) Ebd.S.78
- (8) Ebd.S.76
- (9) Kleist, a.a.O.,S.164
- (10) W.C.Reeve:IN PURSUIT OF POWER, UNIVERSITY OF TORONTO PRESS Toronto Buffalo London 1987.S.152

- (11) W.C.Reeve, a.a.O.,S.151
- (12) Kleist, a.a.O.,S.162
- (13) Ebd.S.162-3
- (14) W.C.Reeve, a.a.O.,S.164
- (15) Kleist, a.a.O.,S.166
- (16) I.Denneler, a.a.O.,S.86
- (17) W.C.Reeve, a.a.O.,S.172
- (18) Kleist, a.a.O.,S.167
- (19) W.C.Reeve, a.a.O.,S.165
- (20) Kleist, a.a.O.,S.158
- (21) Ebd.S.164
- (22) Ebd.S.173
- (23) R.Labhardt:Metapher und Geschichte, Scriptor Verlag Kronberg/Ts.
1976.S.165
- (24) Kleist, a.a.O.,S.150
- (25) R.Labhardt, a.a.O.,S.170
- (26) Ebd.S.166
- (27) Ebd.S.167
- (28) Ebd.S.165